

日本の仕事文化について

(About Japanese work culture)

キム ドソン

Do Sung Kim

82-371 Advanced Japanese 1

1. はじめに

日本の会社を考えると厳しいイメージがする。日本の仕事文化についてアシスタントや日本人ゲストに聞いてみても、“働きすぎ”、“残業が多い”、“飲み会がある”などの反応があった。まるで軍隊みたいに徹底した職級文化で労働時間も世界的に長いほうだと聞いた。このプロジェクトでは日本の仕事文化についてもっと詳しく調べたいと思う。日本の仕事文化の特徴とは何だろう。私は今年卒業クラスとして本格的に就職活動をしている。だから仕事や会社文化について考える時間が多くなった。私は日本の文化が好きで、いつかは日本でも働いてみたいと思っているから仕事文化をトピックにした。それに母国の韓国の仕事文化も日本に似ているところが多くて面白かった。何よりも注目すべきところは現在日本の人口、特に若者たちが減っていることだ。労働人口は高齢化されているが正社員で働いている若者たちは減っているような気がする。この社会的な問題をとらえるためには、日本の仕事文化を理解することはとても大事である。今の段階の暫定的な結論は日本の仕事文化は個人より組織を優先するとても厳しい文化だが、その文化も最近、変化しようとしている。

2.1 日本のリクルート過程の特徴とは

学生が大学を卒業し、就職活動をする、つまり「新卒」になる。どの国でも同じだが、就職の過程は決してやすすくない。日本では、面接や筆記試験を含めて身だしなみがとても大事になる。第一印象というのは非常に重要なことで、入社を希望する会社の前で新卒はきちりと片付いた姿をみせる必要がある。例えば、身だしなみには正しい服装がある。アメリカでも普通面接の時スーツで靴を履く。しかしもっと自由に服を選ぶことができることになっている。Googleのような会社の場合、面接でTシャツとジーンズを着るのもできるらしい。しかし、日本でこれは想像できないことだろう。日本では“リクルートスーツ”と言われる服装がある。男性も女性も暗い色のスーツで、大体シャツは白、靴は黒になっている。決してこの風に着なければいけないことでは

ないが、ほとんどすべての人たちが同じ姿をしているから、一人で得意ならば面接官に睨まれる可能性が高い。

それに日本ではエントリーシート作成と言われる過程もある。エントリーシートとは、アメリカでも使う Resume や Cover letter に似ているもので、自分のプロフィールを書き、色んな質問に答えてキャラクターを入社したい会社にもみせることである。エントリーシート作成はオンラインでする時もあるが、そもそも自筆に書くことになっていて非常に大変な過程である。日本語が母国語じゃない外国人にはもっと大変になるんだろう。日本語が母国語ではない留学生を調査した結果、確かに面接や筆記試験の方法について知りたがっている人たちが多かった。しかしエントリーシートの書き方や身だしなみも大変なところでは間違いない。

2.2 入社してから

新卒がいろんなプロセスを経て入社しても安心するのはまだ早い。職場での生活は決して優しくない。日本職場での厳しさの一例は職級である。目上の人には敬語、そして目下の人には謙譲語を使うことは日本文化である。これは職場でも同じで、上司や顧客には必ず敬語で尊敬する態度を見せる必要がある。それに呼び方にも違いがあって、上司を呼ぶときには名前や苗字ではなく、職級でよぶ。例えば、新入が坂本係長を呼ぶとき、普通の呼び方は“坂本さん”ではなく“係長”と呼ぶ。ただし、顧客との対話の中で上司を名前て呼ぶのは大丈夫らしい。このように上下関係が厳しいのが日本の職場である。アメリカの場合、日本と同じ、Director や Vice president などの職級は確かに存在する。しかし、先輩と後輩の関係が日本のようにきびしくない。呼び方も職級ではなく、名前て呼ぶのが普通になっている。例えば、自分の友達はこの前夏ニューヨークの投資銀行でインターンシップをした。彼はインターンシップの時いろんな上司に合ったが、彼らを職級で呼ぶ時は一度もなかったらしい。しかも Managing Director, 日本では常務と言われる高い職級の人にも名前て呼ぶのできるらしい。このような上下関係は日本では想像できないことである。こういう文化的な違いがあるから日本は外国人には働きにくいところかもしれない。言語だけではなく、上の人を尊敬し、自分のことを引き下げるのができないと社会生活ができるんだろう。日本人ゲストの井口さんや斉藤さんも同じ言葉をした。井口さんによると、ただの VISA の問題ではなく、文化的な違いで外国人が日本で長い間働いているのは難しいかもしれない。そして斉藤さんは、最近大企業では外国人の正社員の数が増えているが、アメリカと比べると日本はまだ外国人として働きにくいところと言える。

2.3 これからの問題

職級の例だけではなく、職場での辛しさは人によって違う。下の表を見ると、世代によって設問の結果が違う。例えば、20代には上司に叱咤されることが一番辛いことだと答えた。代わりに30、40代は有給を取りにくいことを指摘した人が多かった。世代にかかわらず飲み会への参加があまり楽しくないところは面白い結果である。この表を見てから思ったのは世代間のコミュニケーションがとても大事な問題ということだ。20代にとって上司は上の世代の人たちである。上司に叱咤されることが嫌いののは20代の甘いところもあるが、上の世代とのコミュニケーションがよくできないことを見せる。それに40代も“ゆとり世代のコミュニケーション”が辛いことだと指目した人が9人いた。この問題を解消するためには上下関係に余裕が必要だと思う。上司の権威が絶対的な日本の職場では目下の人が声を出すのがとても難しい。上司、あるいは上の世代はこれを考え、目下の人にもっと近寄る必要がある。そして目下の人も、上司を尊敬しながら自分の声を出すことで世代間のいいコミュニケーションができると思う。

3. おわりに

日本の仕事文化はその最初から非常に厳しい。垂直的な組織で一生懸命長い時間かけて働いているのは誰にも大変なことである。そして現代になって、自分自身の人生と自由を大事にする人たちが増えているようだ。特に日本の若者たちの中では、ニートやフリーターになる人もいるらしい。だから職場の文化も少しずつ変化している。現在、少子高齢化社会に進入した日本の仕事文化がどんな風になるかは注目すべき部分だと結論として思う。

参考文献

<https://job.career-tasu.jp/2018/features/foreign/student/startup/04.html>
http://blogs.itmedia.co.jp/harada6stars/2016/06/post_301.html